

◆2016年8月30日 武蔵高等学校附属中学校

高橋豊校長先生

インタビューその1

©森上教育研究所



<左：森上教育研究所 特任研究員 若泉 敏 右：武蔵高等学校附属中学校 高橋豊校長>

若 泉：都立武蔵高等学校附属中学校の入学選抜適性検査の概略を申し上げますと、検査Ⅰ（国語読解作文）は都立一貫校共同作成問題になっていますが、中学校開設（2008年）当初からの出題傾向【作者の違う2つの文章を出して、その中の共通主題にかかわって、自分の考えを述べていく】という点では都立小石川中等教育学校と同じで変わっていません。検査Ⅱ（算数・社会・理科）は、本校では大問2で社会科傾向の問題を独自問題で出題しています。特色ある教育である【地球学】との関連で、本校の独特な問題を作りたいという意欲が表れています。検査Ⅲは、理数に関する独自問題で本校の適性に適う実力を探る意欲ある問題です。育てたい生徒像に基づく測りたい力がどのように問題に反映されているのかを、最初にお話してください。次に、選抜で測った力が、入学後の教育活動の中で、どのように活かされていくのか、そのあたりをお話したいです。最後に、高大接続（大学入試）および高校改革を視野に入れて、本校の教育をどのように展開していこうと考えているのか。そのあたりまで触れていただければと思っています。

高橋校長：いま世の中が先行き不透明ということもあって、いまある仕事のうち多くの仕事に就けないと予想されている。その中であって、いかに生きる力を身につけるかということが目標になります。本校の校訓の一つに、【向上進取】という言葉があります。困ったときにも、さまざまな人のつながりを通して前に進んでいくことができる力。そういう子を育てていくというのが、本校の大事なことだと思っています。その教育を受けて効果が出る子に本校としては入学してもらいたいという思いで、適性検査をおこなっています。幸い学力の高い子供がうちには入っていますので、その子たちを、思考力であるとか、判断力、表現力であるとか、更につけていきたいと。

若 泉：適性検査Ⅰでは、どういう力を探りたいと。

高橋校長：適性の中身については、やっぱり文章をしっかり読み取って論理的に表現する力を、ぜひ見たいと考えております。そういうところが求められる問題になればというのが、検査Ⅰにあるんです。

若 泉：作者が違う文章を一貫して出している。これは、学力検査で一般にみられる1人だけの作者の主題に迫るというのではないですね。これには大きな意味合いがあるだろうと思うんです。外部から見てももちろん、高く評価しています。

高橋校長：そうですか。

若 泉：というのは、作者が違い、取り上げ方が違い、話題の具体的な場面が全然違う2つの文章から、共通の見方や考え方を探っていくのは、12歳の子供の水準からしますと、非常に高度な思考力が試されている。しかも、全体を俯瞰した上で共通主題を抽象的な形でつかみ取り、具体的な自分の経験とからめて自分なりの考え方を表現する。論理的で的確な読み取りを要求していると思うんです。

高橋校長：12歳の子ですからね、解いているのは。(前任の校長)守屋先生から、(若泉が)お見えになったときは、そう滅多に来ていただけないんだから、ちょっとそういうところもお話を伺えたらと思っているんですよね。

若 泉：今回は校長先生のお話为中心ですから、私の見解は控えますが、関係することを一言だけ申し上げますと、全国の適性検査を見ていると、異なる作者の文章を(素材文として)出すというのは少ないんです。全国でも東京都が初めて出したのかなと。小石川と武蔵。

高橋校長：いまお話しされたように、共通するものを読み取る力に関しては、さすがに深くご覧になって。だいたい毎年の傾向はあるかもしれませんが、そこは非常に、なんていうのかな、よくご覧になっているのかなと私もあらためて思った次第なんですけど。

若 泉：学習塾で対策は立てにくいんです。

高橋校長：なるほど：

若 泉：そこを上手くついできた。形式的に過去問を練習して訓練してきたとしても、じゃあ今年の出題に対してしっかり対応した解答を書いているのかどうか。これを検査しているんだろうと思います。初めて読む話題について課題の共通性と、抽象と具体の関連性を的確にとらえることができるかを測る、これが頭のいい子かどうかの分かれ目になってくるのでしょうか。塾側は非常に苦労しているはずですよ。となると、本校は受検生の本質的な資質を問うべく出題しているのか。それは、わかりません。しかし、このような出題は適性検査らしい問題であるということと言えます。私は他の一般メディア取材とは違う形で、守屋先生ともお話をしてきました。適性検査Ⅱの大問2は、どのようなねらいを持っていますか。

高橋校長：グラフが出てきたり、表が出てきたりというのがありますので、そういったいくつかの資料を見て、例えば、今年の問題の曲線的なグラフのような資料はあんまり見たことがないかもしれないですよ。誰もが経験していないものだと思うけれども、それに対して、落ち着いて論理

的に数値的なものを分析する力、あとは好奇心みたいなものも、もしかしたら測れるかと。それから、いろんな可能性を探る。解答の結果から、そういう子が一つ前に進めるのかなと、そういう子たちが解けているのかなと想像はしているんですけどね。

若 泉：いまおっしゃった通りだろうと思うんですけども、これまで学校が十分にできなかった課題を、一言申し上げておきます。高橋先生は今年着任の校長でいらっしゃいますし、場合によっては守屋校長のように長くお勤めになるかもしれない。その中で一つ探っていただきたいことがあって。適性検査の得点ではなくて、要素ごとの測りたい力や資質を、どのように解答しているのか、それを調査して把握し、その上でそれが入学後の学力の伸長とどうかかわってくるのか、このデータをきちんととっていただきたいと思うんです。それをしておく、その後の適性検査問題の作問に反映できるだろう。そういうことをしている学校は、なかなか無い。そういうデータをもとにして、今度は新しく実施予定の大学入試のことも、それから若い人の能力開発の面でも、どんな力が問われなきゃいけないのか、こういうことについて、確証をお持ちになれるし、教員たちにとっても大変大きな財産になる。そのあたりを模索していただける学校になればなと私は期待をしています。

高橋校長：なるほど。

若 泉：その観点で、私も適性検査問題を評価したりしているところです。

高橋校長：適性Ⅱに関しても、複合的なところを読み取っていかなきゃいけないとか、文章の中にもいろいろなヒントが書いてあったりとか、あの中に定義が入ってきたりすることもありますのでね。そういう意味では柔軟な思考力がなくちゃいけないし、それから、たくさん言葉を書かせるわけじゃないんだけど、やっぱり頭の中が論理的に整理できているのかも、求められますね。

若 泉：その中で、突出した子がいるかもしれない。とくに適性検査の中で突き抜けた表現力だとか考察力を持っている子供たちが、学力とどう関連するのか。これは視点としてお持ちいただいたほうがいいかなという気がする。

高橋校長：そうですねえ。

若 泉：大学の入試問題が大きく変わる時代に来ています。しかし、新テストで検査しようとしている思考力や判断力、表現力、そして主体性や人間性などの力は、実は公立中高一貫校では1999年から、適性検査という形でその力を測ってきた。大学新テストのサンプル問題を見ますと、おやおや、12歳で測る適性検査とほぼ同じじゃないかと私は見えていますよ。

高橋校長：おっしゃる通りですね。ある意味、適性に近づいてくるような形。今度大学入試を分析したときに、同じような話がまさに、だいたい似たような言葉を使って、大学入試もいずれ説明できるんじゃないかと思えますね。はい。

若 泉：ただ、研究者がいない。国立政策教育研究所に、いわゆるテスト理論という形で研究している学者はいますが、適性検査そのものを対象にした学者は一人もいないと聞いていますので、びっくりしました。

高橋校長：なるほどねえ。私たちの適性検査も手探りで、最初は先人のかたがたが本当に苦労しながら積

み上げてきたと思います。ただ、確かに算数的な問題である、社会的な問題であるとしても、決してそれは単一の教科の問題とは言っていません。教科横断的なんです。とくに適性のポイントは、横断的な力。もちろん各教科の縦型の学力の育成を6年間継続してやっていくことも大事ですけど、いかに横のつながりを作っていくかというのが、それがうちの教養教育だと思うんです。

若 泉：柱の一つに教養教育があって。もう一つは、本校独特の地球学にかかわってくるんだろうと思うんですね。

高橋校長：そうですねえ、まさに。地球学も教養教育そのものですからね。

若 泉：適性検査Ⅲに関して、に入ります。いまや都立武蔵の検査Ⅲは、都立の検査問題では最高レベルの問題を提示しているんじゃないかなと私は考えている。数年前から。それまでは小石川が非常に優秀な問題を作っていたけれど、解答例のミスを出しましてね。今年は川崎市立川崎のほうで。検査問題で使った言葉が、元資料に存在する用語と異なっていたということで、全員に得点を与えたのですが、問題自体は素晴らしい出来の問題でした。適性検査で測る力が、記憶した知識や技能そのものではなく、提示された問題の中に存在する文章や図表などの資料、それらを判断の根拠にして考察する力を見るんだったら、たとえ、元資料と異なる用語が検査問題に存在していても問題ないじゃないかとは申し上げました。申し上げました、というのは川崎市の教育委員会なんです。教委の担当指導主事に「いい検査問題だったよ」と伝えたら非常に驚いていました。ともかく、評価するところはきちんと評価するんですよ。いい問題だったのに、扱い方が下手、とか（笑）。

高橋校長：そういうふうに見るかたはいらっしゃるんですね、適性もここまで来たのかなと思いますね。

若 泉：適性検査を学力問題化したいというのは、普通の教員の思いです。

高橋校長：作るほうを考えますとね、適性の難しさはありますよね。さまざまな面でね。

若 泉：そうですね。

高橋校長：解くほうで、私も過去の問題を見てみると、まず文章をたくさん読まなきゃいけない。検査会場で、安定した気持ちで最後まで集中して読み取っていくことが必要です。適性Ⅲだと、よく言われるリーダー的な力というんでしょうかね。決断する力ということも、数理的な力であるとか、科学的な力もいろいろあると思うけど、私は、物事を決めつけないで、仮説を立てて、仮説というのは、仮定してみようということで、全部つながってくると思いますから、そういう意味から言うと、まず問題をみていろんな可能性があるところを、どんどん探っていくところから始める。逆に言うと、そういう子が一歩先に進めていく可能性があるかと思っているんです。いかがでしょうかね、そのあたりは。

若 泉：武蔵の過去出題の問題で良問を数点挙げますと、モビールの問題があります。確か1年目の問題です。「係員が説明してくれたようになっていない」問題点を具体的に説明し、さらに、問題点を直す方法を説明する問題ですが、問題の冒頭にさりげなく、モビールというのは回転しなければモビールにならないんだと言うんです。理科の[力のモーメント]の計算をすると正しい数値になっていて問題点はない。図工の観点が必要なのです。モビールの問題を理科で訓練してきた子どもは、力のモーメントの公式に当てはめて計算しますから、解答できなくな

る。最初に挙げられている、回転しなければモビールにならないんだ、という係員の言葉。そこに考察の範囲を広げた上で問題が解けたかどうかを問うている。これはたいした仕掛けですよ。

高橋校長：文章をちゃんと読んでおかないと、というのもありますよね

若 泉：しっかり読むというのは、問題文の直前のところでいい、というのが、私立中学受験型の問題。そうじゃない仕掛けを作ってきた。これは見事なもんです。そういうような仕掛けを随所に散りばめられる力というのが、作問者の力量だと私は考えています。その他に2012年、今から4年前の問題で重さ調べの問題があります。風船の中の気体の重さと空気の重さの違いをできるだけ正確に調べる実験方法を考える問題でした。小学校や中学校では扱わない課題が出されたことがあるんですね。考察するための条件はきちんと書いてある。それを読み取った上で、たとえば氷の浮力。どの子も体験していることとどう関連させて考えるのか。つまり異種の中の共通性。考えられるいろんな知識や理解したことを、本問でも適用できるかの力を見ている。こういうところも武蔵のなかなか高度な作問の仕方だと思います。

高橋校長：あらためて、そういう形で分析していただけると嬉しいです。やっぱりそうですよね。言い方を換えれば、決められた条件の中で、一番最初の一つの条件とか。問題の中に条件がどこかに書いてある。決められた条件を見て、それをどこで使うか。あとは、リーダーとして主体的に考えていく、実際に行動する、論理的に説明できる、そういう力はやっぱり大事にしたいなと思いますよね。

前半部分、適性検査についての稿終了。後半部分では中学と高校の学習や生活の中で、どのような力が育成され、大学入試に結びついていくのかを伺います

◆2016年8月30日 武蔵高等学校附属中学校

高橋豊校長先生

インタビューその2



<武蔵高等学校附属中学校 高橋豊校長>

若 泉：それでは後半部分に入ります。そういう適性検査で測った力が、入学後の教育活動の中で、どのように活かされていくのか、かかわり具合をお話いただきたいと思います。

高橋校長：考える力であるとか、表現する力であるとか、内容の論理的な理解力など、そういった力が強い子、可能性を秘めた子でしょうかね。そういうところから観察力であるとか、自分で調べていく力であるとか。例えば、これはうちの子たちが書いた授業のプリントなんですよ。両方とも生物の問題ですけど、先生の説明を聞きながら自分で理解して、なるほどなと思ったことをどんどん書き込んでいる。それだけで終わりじゃなくて、そこから今度は家に持って帰って、もう一步進めて調べてみる。先生も当然繰り返し指導し、目的をもって授業をしていくわけですけど、だんだん子供たちが、ここまで書けるようになる。全員ということになると、難しいかもしれませんが、やっぱり相当数の子がこのレベルまで書いてくるようになる。1人2人じゃ決してないという状況になっている。

若 泉：いま提示されましたのは、中1、中2の、たとえば顕微鏡の使い方であったり、色の吸収といった授業用の課題プリントです。通常のプリント学習と同じように四角枠があって、重要用語をまずは記入するわけです。それぞれ小問があって、文章で書いていくことが求められています。ところが、それにとどまることなく、枠の外にいっぱい、関連することや自分なりの考察過程を記入している。中2の生徒にいたっては真っ黒になるくらい沢山書いているわけですね。細かいところまでは読めませんが、そういう学習活動が展開されているということですね。

高橋校長：そうですね、探究し続けるということが、これによって養われると思いますから。やっぱりこ

それは将来の課題解決力の育成につながっていると思います。それともう一つ、地球学ですね。まさに私たちが住んでいる地球はさまざまな問題や課題を抱えていますので、まずは1年生と2年生のときに調べて、地球がいまどうなっているのか、どういう課題があるのか知った上で、じゃあ何か一つ自分で研究してみようという形につながっているのが地球学なんです。1年生のときは基礎講座ということで、文明開化の夜明けであるとか、数学の軌跡とか、社会の中でのスポーツの意味を探るとか。新聞から世界を覗いてみようとか、まずさまざまなジャンルに触れてみて。ほかにサマーキャンプ。2泊3日で全員中学1年のときに尾瀬に行っているんです。あれだけの自然がなぜいまでも残っているのか。そういったことを調べた上で、実際に歩いてみよう。今度は2年生のときにはもう一歩進めて、さまざまな人の考え方にも触れながら。たとえば捕鯨に関して。クジラを捕るということで見ると、賛成であるとか反対であるとか。中立もある。それでディベートをやっています、あなたは賛成の役割をなささい、反対の役割をなささいと。そういった中で自分の考えはちょっと脇に置いて、それぞれの立場を決めてじゃあなぜ賛成するのか、なぜ反対するのか、中立の人はどうなのか、そういったことを調べて意見発表する。表現させることをやりますね。また自然体験ということで、【結い体験】と言いますが、夏休み期間中に新潟県の十日町へ2泊3日で行きまして、実際に田植えをします。田植えをして出来たお米が秋に送られてきて。それから、1泊は農家に民泊をします。実際に農業をされている方々からお話を伺って、1日生活をともにして、そのような体験もさせます。そして3年生のときに、各人が興味関心を持ったものを論文作成して発表すると。

若 泉：それは地球学から発展していくものでしょうから、自分が興味を持ったことについて、論文作成していくと。1年間でということになりますでしょうか。

高橋校長：そうですね。中1・2では全員共通の課題についてグループ学習をおこなっています。2年生のときにテーマを決め、3年で個人課題研究ですね。こちらに昨年度の論文の例ですね。これだけのものを子供たちが作っています。

若 泉：非常に広範囲に論文の話題が展開されていますが。

高橋校長：中学生のときは、本校では校則で、学校の行き帰りは寄り道はしちゃだめだとなっています。ただ中3には一つだけ認めていることがあります。図書館なんですね。インターネットでいまは簡単に調べられることもできますけども、そうじゃなくて、図書館で自分で文献を読んだりすることを勧めています。先生が生徒の研究を手助けしながら、年度末に論文を作成して発表するという形。

若 泉：そこにおける先生の手助け、支援というのはどういう形でおこなわれますか。

高橋校長：先生の支援というのは中1と中2までが大きいんですけど、中学生ですので文章の表現を手伝ったりとか。中3に関しては進行管理であるとか、そういったところが中心になってきます。中身に関しては、まず先生がたご自身が研究してきたことを子供たちに話をしているんです。そういった話から、生徒たちが感じ取ることも一つ大きいと思います。生徒の中に、これから生まれようとしている、物事に対する知的好奇心でしょうかね。そういったものを呼び起こすというんですかね。

若 泉：なるほど、呼び起こす。

高橋校長：そうですね。そういうところに先生がたが一番大きな手助けになるんじゃないかと思えますね。主体性という形で。あなたはこうなさいという形では先生は言いませんので。

若 泉：生徒たちの関心に応じて具体的な課題を持って研究に入るとというのが3年生の段階、その個人研究のときに基本となる、考察の仕方であるとか、関係付けを見つめる視点であるとか、表現する方法であるとか、そういったことを中2までにどう育成していくのか。

高橋校長：これは、私たちの学校で作った学習活動ノートというんですけど、1日のダイアリー、日記帳です。例えば、何かがあったときに全部メモする。自分が考えたこと、学んだこと、試験のあとにもポートフォリオという、いわゆる自分の振り返りですよ。試験後にできたところ、できなかったところ、それを次はどう改善して進めていくのかを、日常の中で常に書かせるというのがあります。自分の頭で考えたことを書きなさいと。当たり前かもしれないけど今年度の目標とか。平成28年に私はこうなっていたい、学習面とか、振り返ってみようとか、そういったことで、一つひとつ考えたことを整理して表現するというのを、日頃から子供たちにはさせています。これを先生が見るのは相当大変なことですけども。そういうことの積み重ねも、研究論文のまとめのところに中学生段階の集大成としてあらわれる。当然、高校段階にも継続していくわけです。そういう力を普段から養っているというのはありますね。改良に改良を重ねて6年目くらいになるのかな。うち独自のがだいたい完成してきたかと思えます。ただ、高校になったらまた主体性といったこともさらに求められますけれども、中学生のうちには、道筋を与えてあげるということも大事かと思えますので。

若 泉：小学5年生くらいから適性検査の準備をする児童が多いと思いますけども、小学生が都立武蔵を志望するとしたら、やっぱり日常の勉強の中で興味関心の幅を広げつつ探究する気持ちをどこかで育てていくと、入学後の地球学で関心のあることを思い切り展開することができるだろうということになるんでしょうかね。

高橋校長：そうですね。いまのお話がまさにその通りと、あとは表現をするという訓練も必要になってくる。

若 泉：そういう好奇心を広げてきた子供たちが、適性検査に合格するだけじゃなくて、入学後の学習活動に活かされるよということもお訴えになりたいのかなと思いました。

高橋校長：おっしゃる通りですね。あとは科学的というんでしょうかね。物事は常に100%絶対のものはないという考え方。かつては何の疑問も抱かなかったことが、だんだん当たり前ではなくなることが沢山あります。そういうふうになるのはなぜかな？という物の見方とか、柔軟な見方とか、そういったものも、本を読んだりして、いろんなところからつながって行って養っておくと、本校ではどんどん伸びていくかなと思っているんです。

若 泉：それが高校生活にどうつながっていくのか。

高橋校長：結局は中学の段階の継続ですよ。決して新しいことをやっていくんじゃないで、横断的な。どうしても大学入試がありますので、教科単独の色彩がより強くなっていくんですけど、物事を探究する心であるとか、好奇心であるとかを常に求めながら、中学で養ったその気持ちを、高校でも失わないことが、私は大事だと思っています。

若 泉：中入生に関しては、そういう下地ができて高校に上がってくる。しかし高校受験で入ってくる

枠が 80 名。いろんな公立中学校から来ていますが、中学校によって探究の学習力は質量ともに違いがあると思うんですよね。そうすると、高入段階でまたある程度先生がたの指導が、高校生に対してもあるのかなと思われます。そこをどう工夫しているのか。

高橋校長：そうですね。本校の特徴は、高校から 2 クラス分入ってきます。部活動も全員入部、うちは 100% を超えている状況なんですね。学校説明会でも話すことは、私たちが大事にしているのは 4 つあって、1 つは授業。授業が一番大事。2 番目に行事。それから 3 つ目に部活動なんですね。残りの一つは奉仕の心。本校の場合は中入生と高入生の進捗の問題もあるので、高校 1 年生のときだけはクラスを分けてやっています。高校 2 年生からは一緒のクラスですね。お互いに、教え合うっていうんでしょうかね。この多摩地域って比較的、穏やかな感じの子が多いんですよ。だからすぐ仲良くなるっていうんでしょうか。

若 泉：仲良くなって、教え合いが始まる。

高橋校長：そういう場面が多いようですね。中入生の子は課題もいっぱい出るんですよ。やっぱり授業だけではなかなか間に合いませんので。高校から入ってくる子には（中入生に追いつくことも）求められるんですね。だから課題をこなすだけでも大変ですけど、高校 2 年生になるとだんだんそれに慣れていく。最初のうちは中学から入った子たちが高入生を教えたりとか、部活動で横の仲間ができたりして生徒同士で教え合う。学び合うって一番力がついて役に立ちますよね。

若 泉：中入生と高入生の多様な生徒が入り混じっている中で、一人ひとりが主体的に行動し、また係わりあっていくということができる。これは併設型の中高一貫校の特徴になりますね。

高橋校長：そうですね。今年の 3 月の卒業生でいえば、確かに中入生の結果は 6 割くらいが現役で国公立、早慶上智なんですね。でも高校から入った子も 1/3 の子が難関含めて、国公立、早慶上智受かった、現役で。東工大、一橋大も現役で受かっています。高校から入った子たちは、高校受験を越えているというたくましさもありますので、受験の時期にぐっと伸びるみたいですね。これは変なたとえですけど、部活動で強くなりたかったらどうしたらいいかという、一番いいのは強いチームとやることなんですよ。ですから、中高一貫で来た中入生がスーッと伸びていますので、高校から来て受験を越えて来た子たちと一緒にすることで、学び合いとか、そういうことを通して、人間的にも成長していきます。お互いに成長しますから。相乗効果が 3 年生くらいで表れてくる。

若 泉：通常言われますのは、高入生は、現役で国公立あるいは私立上位に受かるのは厳しいところがあると。ある程度浪人を視野に入れざるを得ないということが、一般の高校ではありますよね。卒業生の大学現役進学率は 50~60%、現役生の難関校合格率は昨今増えているかなとは思いますが。やっぱりまだ浪人があっても仕方ないかなと。ただ経済事情の影響がありまして、ともかく第一志望校一点張りじゃなくてもいいから、現役で入っちゃおうほうがいいというご家庭が増えているとも聞いています。一方、中入生の現役合格率は非常に高いのが、全国各地でも共通しているところでもあります。そういう中で本校においては、高入生も相当頑張っているということでしょうかね。

高橋校長：さまざまな進学校と比べてみても遜色のないところに来ているかと思えますね。

若 泉：守屋校長は、人数で勝負しているんじゃない、率（卒業生に対する現役大学進学率）で勝負す

るんだと（笑）。

高橋校長：もちろん、人数で考えますと、卒業生の多い進学指導重点校にはとても……。中学と高校に入ってきた子たちが一緒に活動していくことの例として、オリンピックで活躍したバトミントンの2人は、中高一貫校の中学に入った子と高校で入った子のコンビだったみたいですね。二学期の始業式に私は大変感動したという話をしたんです。中学校から6年間継続してやっていくことの意味ももちろんありますし、併設型のうちの場合は、新しい友達が途中から入ってくる。すぐ仲良くなっちゃうよって。高校から入った子は不安に思ってる子が多いみたいですね。ただ、いまの高校1年の生徒に聞いても、いま不安どうなの？ そういえば初めはそんなこと思っていたねって。それは学校行事とか、勉強のこともそうですけど、部活動とかそういうことも全部ひっくるめて不安はすぐになくなっていくと。

若 泉：若干戻しますが、中学校段階の英語の伸び、ここは力を入れておられると思うんですけど、本校ではどんな工夫をなさっているのか。

高橋校長：いわゆる英語検定試験とか、外部の試験も入れながら、やっています。授業としては、アクティブラーニングなんて言い方もしていますが、いろいろ取り入れている授業も、いまは中学校でも非常に多いですね。

若 泉：当たり前になさっていることを、英語に関してはこういう形でやっているよとお訴えになるのも、保護者たちの関心をつかみとっていく道筋かなという気はしているんですね。

高橋校長：いまアクティブラーニングという話をしましたけど、まあ、基本的に英語は、4技能に関しては当然うちも伸ばしていく。それから、英語科はだいたい継続して6年間同じ人が指導していきますので。継続性は求めています。中学の段階で早くから英検の相当のレベルまで持っていくとか、目標を立ててやっている状況ではありません。

若 泉：今度は大学受験の出口のところで、具体的にどのような指導をしているのか。例えば、高3の12月を過ぎてからの指導とか、最後のつめの段階で、モチベーションなり、心理面なり、そういうものが非常に影響してくる。ここに教師がどうかかわるかは重要なことだと思うんですが、1月あたりから、本校はどのような取り組みをしているのか。

高橋校長：個別の二次対策になります。そこはもう各教科、ベテランの教員がいますので。生徒たちには学校に自習室もあります。その前の段階から高校3年生の子とは全員面接をしようと思っています。生徒が一番きつい時期でもありますので、そういうところから支えていく。それから、4月の段階から、なんで模擬試験をやるのかとか、どういう目的や目標を持ってやるのかというのを、説明するようにしています。その上でセンターに臨んだあとは、個別の二次対策ですね。基本的には学校で、先生がたが個別の指導。だから先生がたは非常に忙しい。

若 泉：一般的には、高3の先生になると、もう予備校にどんどん通っちゃって、ある程度暇になるんじゃないかという気がしないことはないんだけど。

高橋校長：結局今年の卒業生、約200名の卒業生の中で難関大学（※）が23名、現役で合格したんですね。もちろん他の国公立も現役でかなり受かっていますし。これは先生の細かい、手厚い指導がなければ、そこまではいかない。（※ 東京都教育庁高校教育課の定める、東京大・京都大・東工大・一橋大・国公立大医学部医学科）

若 泉：個別の生徒たちの志望に応じて、先生の手の入れ方が細やかであると。

高橋校長：そうですね。今年もすでにやっていますが一人ひとりの生徒の状況をスクリーンに映して、この子はこういう状況だから、じゃあこの教科は強いよね、この教科は頑張らなくちゃいけないかなっていうのを、客観的に分析して共有するというこさを、高校3年生でやっています。

若 泉：それに関連しまして、親御さんが心配することの一つに、都立武蔵は行事などの多様なことをやりつつ勉強にも力を入れている学校なんだと。うちの子はついていけるかという心配があるんですよ。そんなこと考えなくても、合格したらそれだけの能力があるんだからとは言っていますが、そのあたりを、じくじく心配して考えている保護者もいる。

高橋校長：まあ、まさに今おっしゃったとおり。合格したら同じような子たちです。とくに高校から入った子は、重い鞆を持って来て、最初は課題がたくさん出て、そういうものをヒーヒー言いながらやっているところがありますけども、それがだんだん慣れていきますし、やっぱり、ある程度、程度問題ですけども、子供は負荷をかけることも大事ですよ。確かに学力の高い子がたくさんいますが、でもだんだん一緒に生活していく中で、身についていくものですしね。先生がたもうちは年中保護者会やったり、三者面談やったり、生徒との面談をやっていますので。そういったところで生徒を激励しながら進みます。成績がちょっと浮かばなかった生徒には、指名して面談をその都度やっています。この期間だけは部活よりも勉強を中心にやろうね、と保護者と連携をとりながらおこなっています。1学期の間は保護者会が2回ありました。あと面談は、夏休み期間も含めて随時ですね。

若 泉：一般の高校では保護者会を開いても、高校になると参加率が下がると聞いているんですが、本校ではどうなんですか。

高橋校長：100%に近いですね

若 泉：すごいですね。それはやっぱり教育熱心な親御さんが多い。

高橋校長：もちろんそれもあると思いますし、普段から本校から発信していることもあるかと。担任が中心になりますけど。だいたい200名の定員で190名近くのかたは、いつも保護者会いらっしやるかな。この前の音楽祭のときは、学年200名の学校ですけど1000名を超える保護者のかたが、雨の中でしたけどね、ご参加いただきました。

若 泉：なるほど。そういう保護者の力を教育に活かしていくことは何かお考えになっているのですか。

高橋校長：もちろん、活かすのは当然のことだと思います。例えば、この前、高校1年生の保護者会で話をしたのですが、いままでよりもさらに模擬試験の結果がよかったけれど、いまここで生徒たちを褒めると、すぐ安心しちゃうかもしれないから。先生たちは厳しく言いますので、ご家庭では、少し頑張ったねと褒めてあげてくださいって。さまざまところで、保護者への連絡などは密にやっているつもりです。PTAの活動は大変盛んですよ。

若 泉：そうですか。一般の公立学校とは違う形で動いている。

高橋校長：やっぱり、教育は私たちだけでやるものではないし。結局は、やるのは生徒ですから。生徒の気持ちにいかにか火をつけるか。授業で私たちが一番目指さなくちゃいけないのは、心に火をつけることだと思います。当然、ご家庭のかたと一緒に。子供がちょっと疲れたなあというときには、早めにキャッチしなくちゃいけないと思いますしね。

若 泉：最後に大学入試や高校改革の動きがある中で、本校の教育活動がどう影響していくのか。

高橋校長：まさにいま高大接続の状況が少しずつ発表になっているところですので、まだ全部見えていないところがあるんですけど、なんといっても思考力であるとか表現力であるとか判断力であるとか、そういったものがまさに問われていくと。生きていくために必要な力というのが、大学入試の中でも求められていると思うんです。そういった力を6年間または3年間の中で育てていって、それをこなせる力というのを子供たちに身につけさせたいと考えていますね。

若 泉：本校の教育の中で、新しい高大接続の、新テストと言われる試験に対応する力が自然と備わってくるだろうと考えてよろしいですか。

高橋校長：そうですね。まさに、それをもっともっとブラッシュアップしていかなくちゃいけないと思いますけれどもね。いままでのものを、ベースは継続していきたいと思いますね。生き抜くための力をね。力というのは、まずはそういう力がある子が入ってくる。というものを、適性問題も含めて、よりみなさんの期待に応えられるものを作っていきたいと思いますので。

(インタビュー終了)